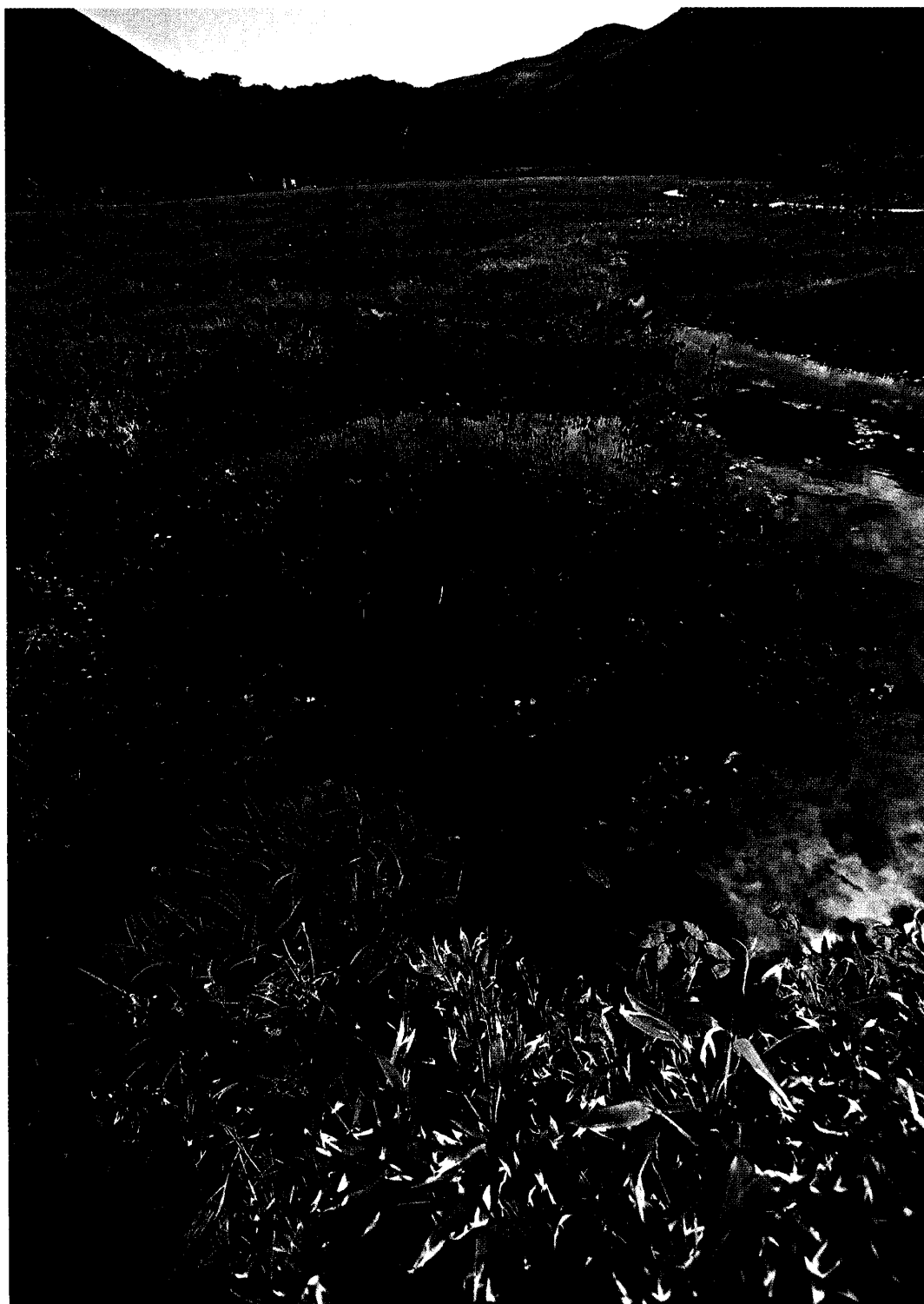


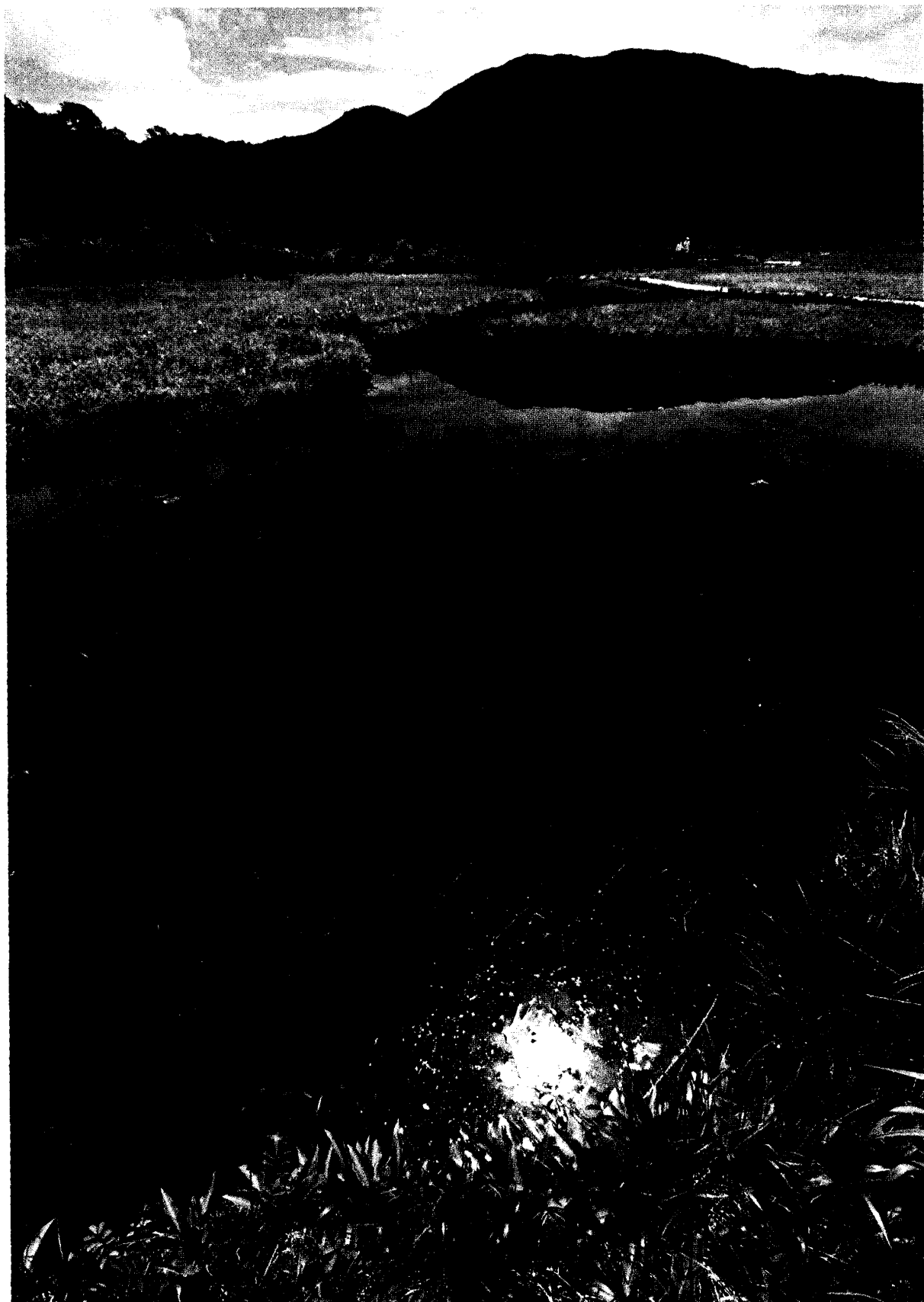
## 夏から秋へ（写真）

From Summer to Autumn (Photograph)

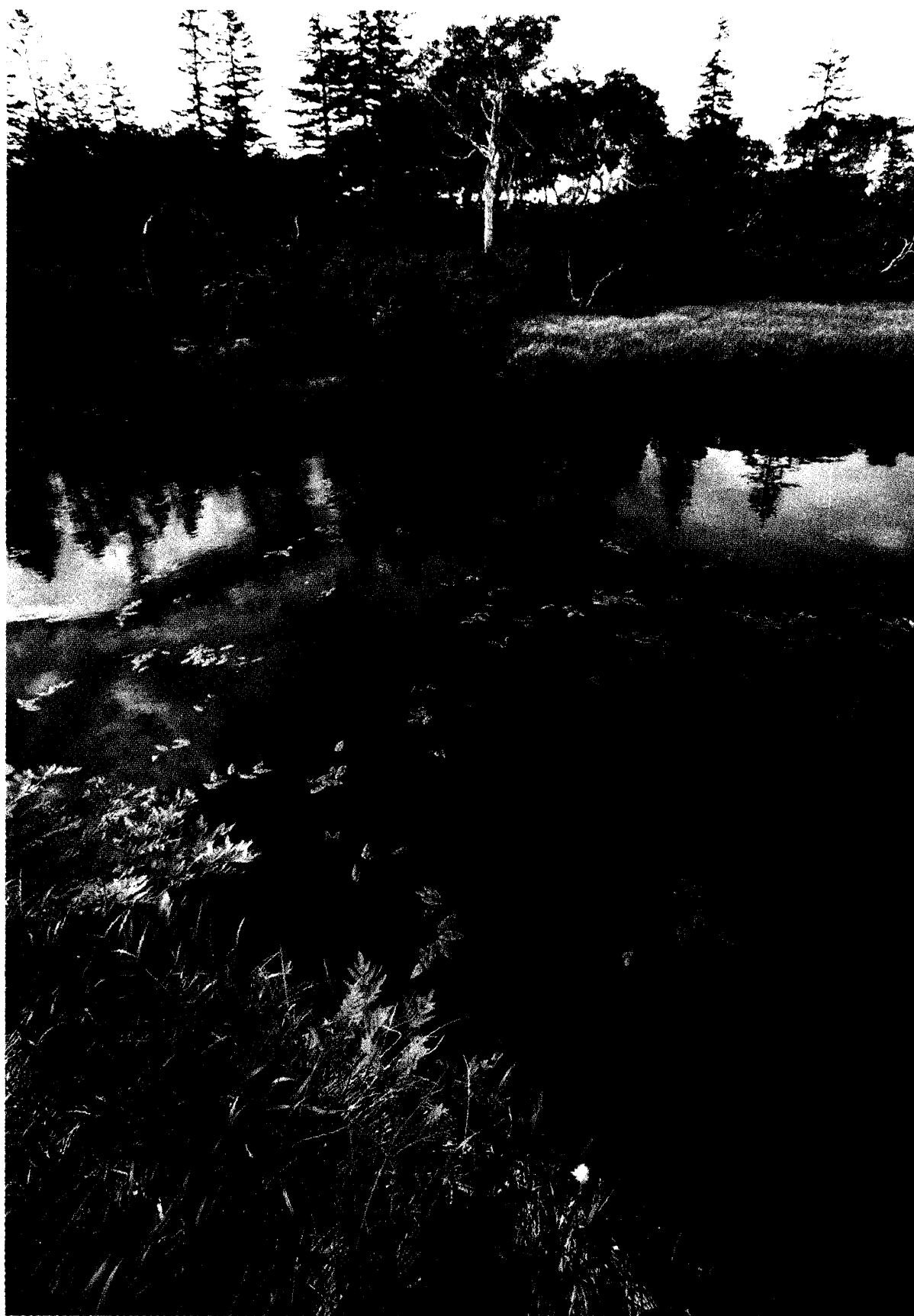
藤 原 等

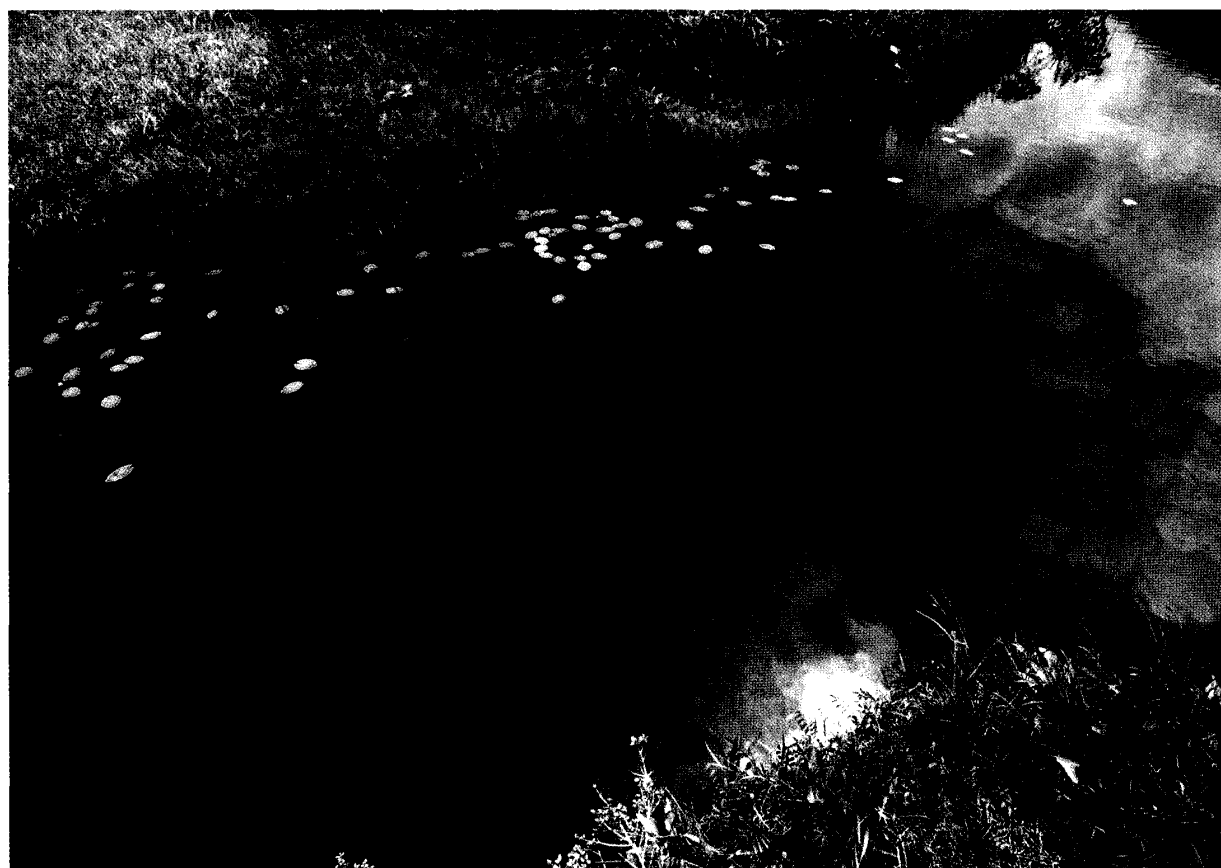
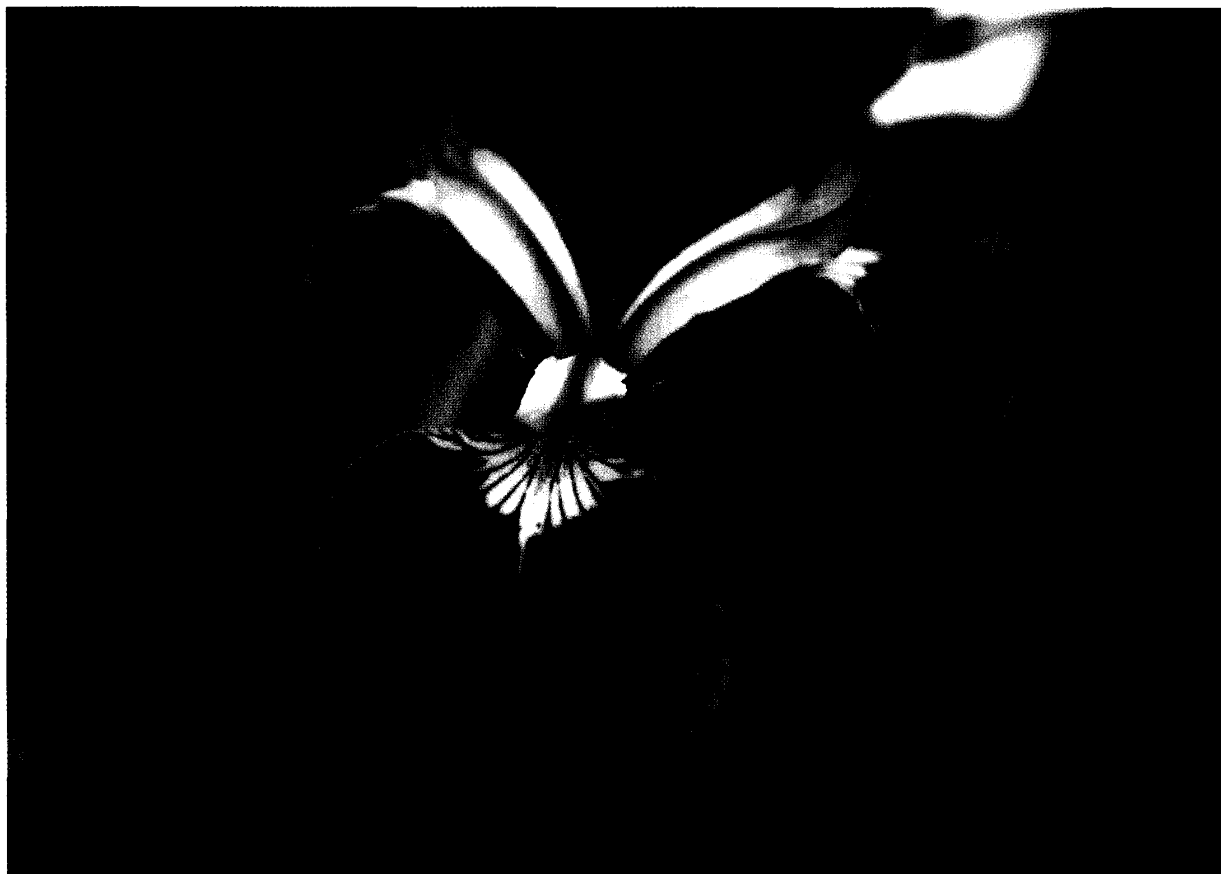
FUJIWARA, Hitoshi





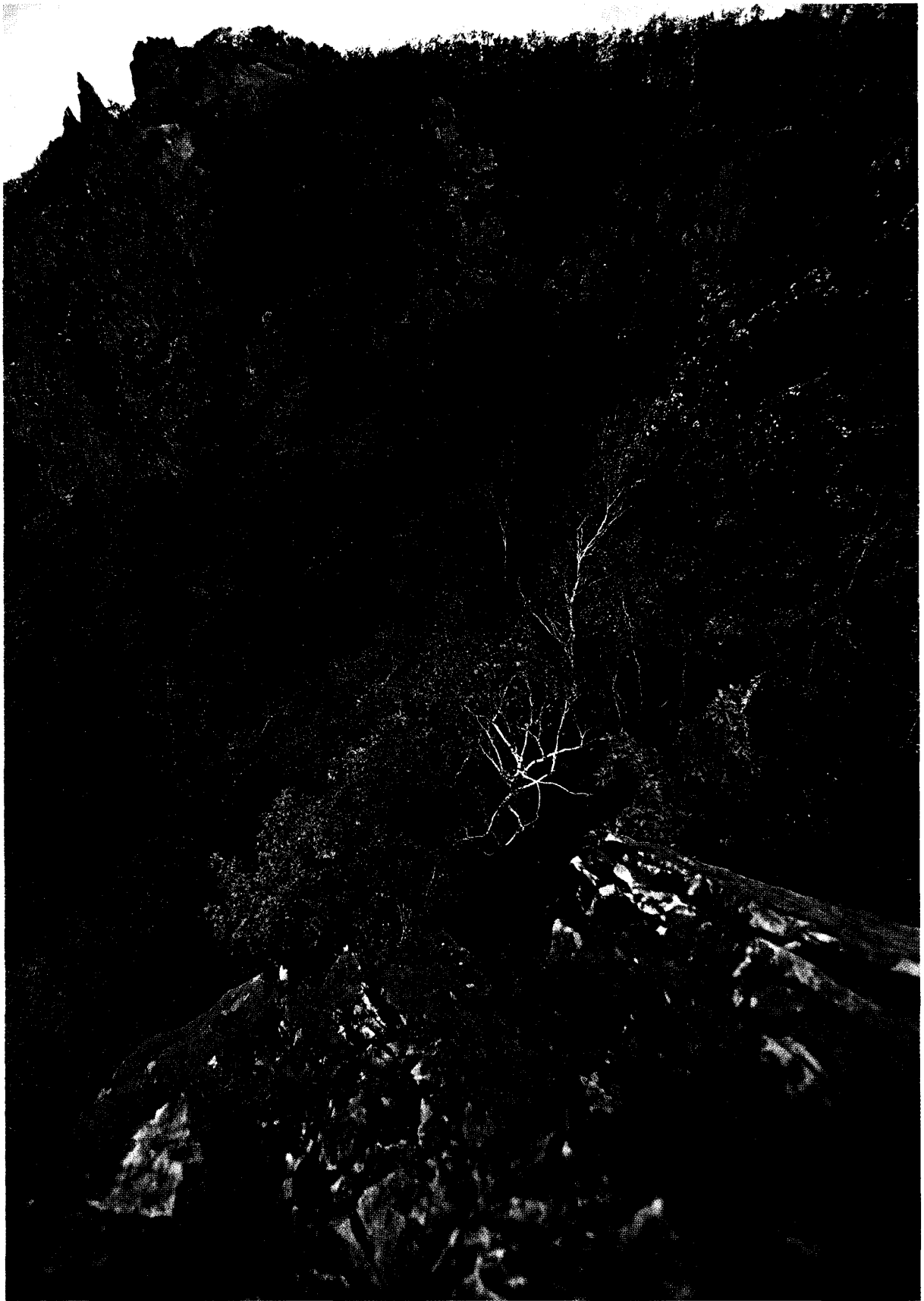












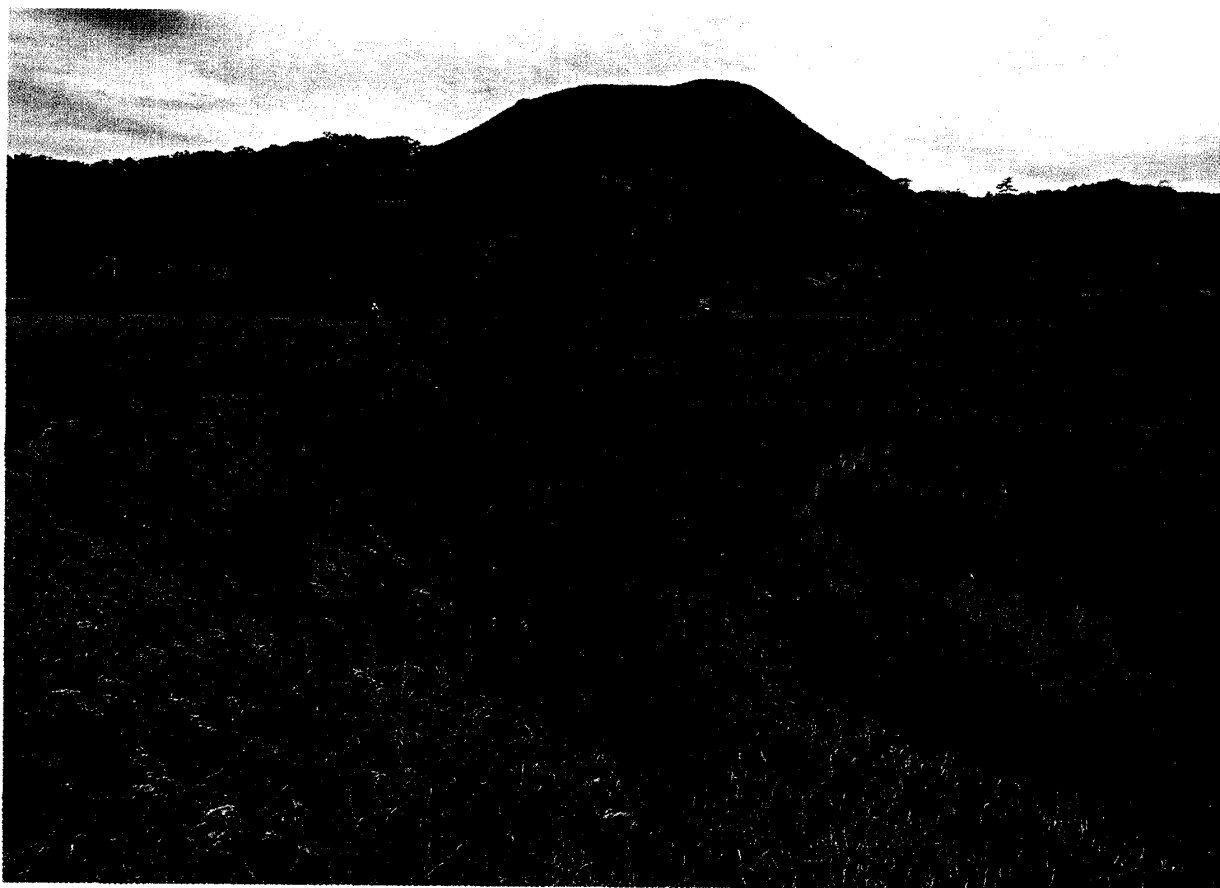


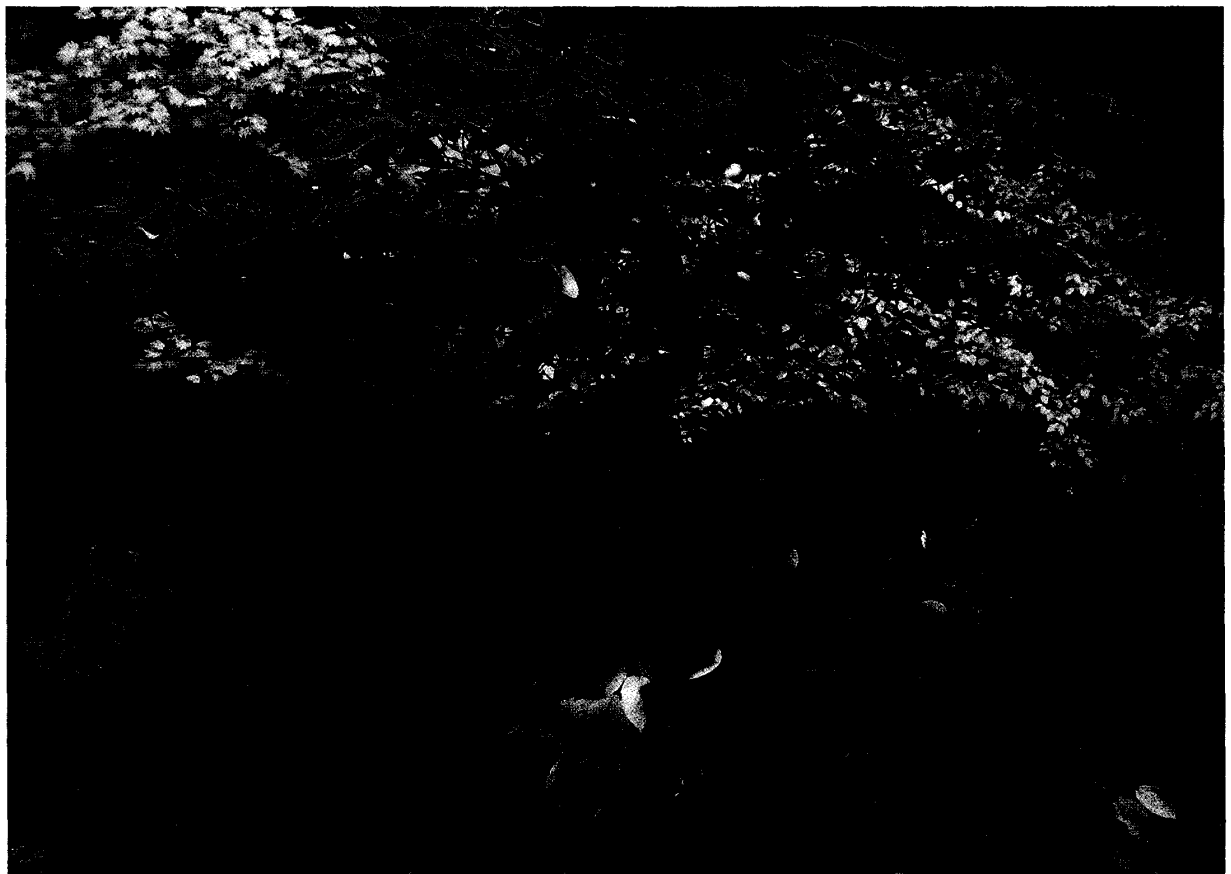














ボクの中学校時代、白黒写真が全盛を極めていたわけですが、「密着」という用語が幅をきかせていました。写真を大きく引き伸ばすことは可能ではあっても、コストが高いということもあって、6×6 (cm)判とか、6×4.5 (cm)判、6×9 (cm)判で撮影できるフィルムを使用して、そのネガを印画紙に密着させて直接露光して写真を得るというものでした。カメラも二眼レフとか、ジャバラ式のスプリングカメラとか、6×9 (cm)判以上の大きさでは暗箱式のカメラを使っていました。いわゆるDPEの中でDとPが主力であり暗室作業上で技術を競っていました。カメラには露出計もなくオートフォーカスもない、ズームレンズもないという時代でした。露出の決定とフィルム現像は高い相関があり、自分の露出に合わせてフィルム現像をどのようにするのか、現像液をどのように調合するのかで、できあがる写真のできればと味わいが違って来るのでした。白黒のモノトーンであっても白と黒の色調と諧調は本当に決定的な意味を持っていました。ボクは町のDPE屋さんの暗室に出入りしお客さんの貴重なフィルムを現像し、密着の焼付や引き伸ばしをして稼いでいたのです。自分の家の四畳半の窓をベニヤ板や古材と軍隊の毛布で遮蔽し、単品の化学薬品を調剤しフィルム現像液と印画用現像液を作りました。D76とD72という天才的な現像液処方の基本があり、それを微妙に自分なりに薬品を加減し変化させたものでした。考えてみれば、ボクはある時期、自然科学系の分野で学び、「理科」の教員免許状を入手した動機がこのあたりにあるのかなとも思っています。

やがて、ライカを代表とした35ミリ判カメラが国産でも製造され、距離系連動式のカメラでピントあわせをすることができるようになったのですが、距離系非連動レンズも多くありましたから、ピントがあっているかどうかは写真の評価項目の一つでした。レオタックスというライカそっくりの国産カメラを手にし、このカメラに135ミリという望遠レンズをつけますともう大変なことが起こりました。カメラのファインダー像と撮影レンズの位置の違いから撮影されているものが違うという（パララックス）、写真家にとっては泣いても泣き切れない困ったことが起こったのです。ボクは数々の失敗をしました。その後いわゆる35ミリ判の一眼レフという大変便利なものが生まれました。このカメラにはパララックスがないのです。見たままのものが、イメージしたものがフィルム上に結像するのです。そして、それまではカンに頼ったり、露出計に頼っていたのですが、この露出計がカメラに内蔵されてファインダーの中で露出値の決定をすることができるようになったのです。このように、色々な便利な付属物が付加されカメラ本体が大きくなり重くなったてきたのです。そこへオリンパス光学工業がライカⅢ型と大きさも重さもほぼ同一という一眼レフM1（発売直後ライカ社からの抗議でOM1と名称変更）を発売したのです。ボクが30歳の年でした。このカメラに刺激を受けたことも理由の一つになると思いますが、ボクは30歳から40歳までの10年間、合計10回の巡回展方式による写真展（10テーマ）を毎回、旭川市の買い物公園4条にあったマルセンデパート4階の大催事場を皮切りとして、以後各地開催という表現活動を再開したのでした。カメラはオリンパスM1、OM1、OM2でした。今回の「夏から秋へ」の作品群はキャノンの一眼レフと同社のズームレンズを使用して撮影しています。まさに隔世の感があります。（2004年11月11日記）。